

信頼性

- ・ 信頼性 = 誤差以外の「真の値」の部分が占める割合
- ・ って何？折半法での信頼性係数をすべての組み合わせで算出したときの平均値
相互に相関が高い項目に絞るか低い相関でも多くあればOK
- ・ 項目間の類似度と相関
意図的にほとんど同じ様な似た質問を繰り返す 相関が高すぎる場合も聞く意味なし
似ていないが網羅的にしようと多様な項目を用意する 重要だが低い相関も
とくに選択的に行われるもの、健康法とかコーピングとか が低いけどしょうがない？

妥当性

検証は難しいというが・・・その中身は

- ・ 内容妥当性 必要十分な命名、中身はほんとにいいのか？良さは見れば分かる！もっとも重要では？
- ・ 基準関連妥当性 実際に役に立つのか 何かの予測に使えるのか（予測妥当性！） 研究の意義
- ・ 構成概念妥当性
収束妥当性 何と似ているのか、まあたいていは何かには似ているでしょう
弁別妥当性 従来のもとのどこが違うのか、新たに測る価値、意味があるのか、これも重要

因子分析でのポイントを考えてみると

- ・ 因子数
多くするとより幅広い次元を表現できる 寄与率 だが後ろの方の因子は信頼性
少なくするとより総合的になるが 寄与率
多次元にする必要性 新たな因子の発見、各因子の他の変数との関連の相違が明確なら。
あれこれ尺度化してみても関連が見たい変数との相関を計算 基準関連、構成概念妥当性
やはり自分の「言いたいこと」「仮説」に近いもの、内容的妥当性を！
- ・ 主因子法か最尤法か
最尤法がよいといわれるようになってきたが、うまく計算できない場合も出てくる。
そうなると計算できる主因子法でやるか、結局確証的因子分析へ行く運命か
結果はそんなに変わらないことが多いが、適合度が計算されるようになってきてそうは行かなくなりそう。適合度が根拠というのはデータに忠実という意味でははっきりしていい
- ・ 直交回転か斜交回転か
因子間に相関がありそうなら斜交回転で。たいていはあるでしょう。
因子構造にそんな大きな変化は無い場合が多いが負荷量が違ったりするし
- ・ 既存の尺度を使ったら因子構造が違ってしまった
ケースが多い場合はたまたまとは言にくい
全く違うとは考えにくい、併合されている、分断されている場合が多い 妥当性の検討
- ・ ダブルローディング（2つの因子に高い負荷量の変数が）
期待しない方が微妙に高い因子負荷量 内容妥当性をとるか？
負荷量が小さければ削除も検討、ほんとに必要なのか
- ・ 期待したものが低い負荷量
仲間がいないだけ。削除してあきらめてもいいが、信頼性を確保できないまでもせつかく測定した
のだから重要と思えば単独使用も考える
- ・ 因子の命名
必要十分かどうか、その名前から項目内容が想像されて実際の項目と一致するか 内容妥当性
- ・ 交絡因子が因子になっていないか 性別、年齢など 他の変数との相関を見て妥当性の検討
- ・ 使えない項目を削除する基準はそれほど明確ではない
負荷量とか共通性の値で決めるのもいいが
因子と関連を見たい変数と因子内の項目が関連しているのかどうかなど 結局妥当性
- ・ 確証的（検証的）因子分析 信頼性と妥当性の検証
誤差間の相関を考えられるなど、相関があるなら自由にパスをひけるところがいい。しかし、項目
数が多くなると誤差にいっぱい相関があるようにしないと、適合度が上がりにくいので注意。質問
文が似ているなど、そこに相関がある理由を考えないといけない。
モデルによって適合度が変化するところを見せて、何因子構造か、直交か斜交かを比較できる。